

経験者から聞くボランティア主体の活動とは！ 少人数のスタッフで資金調達と活動拡大をするヒント

2010年度 第3回 2010年10月5日(火)

【学習目標】

ボランティアと協働する意義を理解し、ボランティア・マネジメントの方法を学ぶ。

(1) 幸せいっぱいのボランティア・マネジメント

講師: 近田 真知子 (特活)地球市民ACTかながわ 代表

活動のきっかけ

1993年にタイの孤児院を訪問したとき、子どもがひどい状況におかれていて驚いた。子ども2,000人に対して5人のスタッフしかいない。タイ国籍を持たない子どもに対して政府は1パートもお金を出していなかった。お寺が子どもを保護していることを知って活動を始めた。

あるとき衣類を洗ってアイロンをかけて持参したところ、「お寺では必要ない」と言われた。普通子どもは大人から学ぶものだが、この子たちはそういった環境で育っていない。着替えるということを知らないなので衣類は必要ないと言われた。この経験から、国際協力は相手のことを知らないで自己満足で終わってしまうと感じた。

欠かせないボランティアの協力

ボランティアは安全で楽しい活動でなければだれも参加してくれない。活動を始めて以来、多くの失敗を経験してきた。お金がない、ボランティアに落とす仕事がない、ボランティアが思うように動いてくれない。急に帰る人や怪しい人もいた。下着や鍋を持ってきて売ろうとする人やイベントで化粧品を販売する人も。

事務局は最寄りの駅からバスで30分と遠い。しかし、名古屋や岡山から月1回ボランティアに来てくれる人もいる。大学8校と

インターンの提携をしているので学生が集まってくる。そのインターンが数年後に社会人になって戻ってきてくれる。

ボランティアにはさまざまな職業の人がいるため、多様なアイデアを得ることができる。ボランティアの人数が多いとマーケティングリサーチもできる。例えば、グローバルフェスタでタイラーメンの出店をしたときのこと。マーケティングリサーチができたおかげで長蛇の列ができる人気メニューとなった。70人のスタッフ、ボランティアの協力のもと、2日間で1,500杯を販売した。

ボランティアの意義とは

ボランティアにとって、活動に参加する意義は、社会に貢献し、人の役に立ち、知らない人に会い、真実の国際情報を得る機会であり、自分の価値を再発見できること。これが日本の社会で一番足りないことではないだろうか。

団体にとって、ボランティアとは、人件費削減ができ、団体の信頼度の目安にもなる、団体が社会とつながっていると実感できるものである。だから団体はボランティアとバランスよく関わらないといけない。

ボランティアは交通費を自分で払って働いてくれる。そのお礼として感謝の気持ちをあげる。いろんな知識を持って帰ってもらう。お互いに与え合い、協働することが大切。そうするとお互いに得ることができると思う。

政府・企業との提携や政府とNPOの協力など、協働の形が出てきている。私が提案しているのは第4セクターともいえる、ボランティアとNPOの協働。これを地球全体の公共益にしていきたい。

講師紹介

近田 真知子 (ちかだ・まちこ)
(特活)地球市民ACTかながわ
代表



コミュニケーションを徹底する

私の団体では、まずオリエンテーションで仕事について説明する。すべてを最初に伝えておけばトラブルは少なくなる。多くの方が行き交うため、何事も明文化する。情報交換は重要で、毎朝ミーティングを行い、ランチは途上国のようにビニールシートを敷いて車座で食べ、議論の場としている。伝達・命令系統は一本にする。ボランティアを一人にしない。声を掛け合う。仕事のミスが減らすためにも、ペアで仕事をやらせよう。

ボランティアを褒めすぎてはいけない。スタッフはボランティア

に対していい人のふりをしてはいけない。本音でぶつかっていないと人間はつながっていかない。

報告、連絡、相談を徹底する。「今日の活動、あれでよかったのかな」など、みんなで情報をシェアする。ボランティアもインターンも、ゴールを定めて活動し、辞める時には振り返りシートを作成してもらっている。振り返りでは、この団体がどういった団体なのか分析してもらおう。それを団体のボランティア・マネジメントの肥やしにする。

活動環境の危機管理

安全と衛生を守るため、電話などすべてをウエットティッシュで朝一番に拭く。個人情報とは絶対に守る。空気の入替えをまめに行う。座る場所を必ず決める。その人のイメージに合ったマグカップを用意する。風水も危機管理の一つ。

途上国を支援するというだけではなく、日本にも利益をもたらすという目的をいつも確認する。そして、無理なく継続してもらうため、ボランティアには「いつでも辞められる」気楽さを持ってもらう。

心をはぐくむ

大切なポイントは、心をはぐくむこと。半径3メートルにいる人に親切できなかったら国際協力はできない。家族、友人、隣人に親切にする気持ちを持っていなかったらできない。目上の人を敬う姿勢、挨拶、礼儀を徹底している。お茶は年配の人から

出す。折り畳みの椅子は若い人が座る。挨拶をきちんとする。

当団体はボランティアが主役。十人十色、個人の特技を認め合い、途上国の自立の前に人として自分が自立することも大切。



ボランティアが活躍する「タイラーメン」はグローバルフェスタの大人気店



(2) PARACUP ～世界の子どもたちに贈るRUN～

講師：森村 ゆき 一般社団法人PARACUP 代表理事

チャリティ・マラソン大会「PARACUP（パラカップ）」の始まり

チャリティ・マラソン大会「PARACUP」は、任意団体「パラサイヨ」のイベントとして始まった。「パラサイヨ」は、英語の勉強と社会貢献を学ぶためフィリピンへ行った大学生たちが、そこで出会った子どもたちのためにできることを、ということで、2000年に発足した団体。

フリーマーケットやパーティーなどのイベントを開催し、集めたお金を現地に持って行くという形で10年続けており、全員がボランティアでやっている。毎年8月に現地の子どもたちと交流しており、社会人約60～70人が休みを取って自費で行く。私自身は2004年から参加した。日本でも困っている人がいるのに、

どうしてフィリピンにお金を送るのか最初は理解できなかったが、活動に携わるうちにもっと関わりたいという気持ちが強くなった。

パラサイヨでは、メンバーを班に分けて募金額の目標を持ち、班ごとにイベントや募金活動を行う。私が参加した班では、何か一つのことを皆で成し遂げるイベントをしたいと、チャリティ・マラソンを2004年に開始した。マラソンにしたのは、私を含めたメンバーがホノルルマラソンに参加して感動したから。そして2010年、PARACUP事務局は、一般社団法人としてパラサイヨから独立した。

PARACUPの概要

PARACUPは、毎年4月に多摩川河川敷で行われており、**2010年はランナー3,500人が参加し、500人のボランティアが大会を支えた**。参加費は一般4,800円、中高生2,400円で、一般のレースと比べると少し高めであるが、そこで得た収益を世界の子どもたちのために使う。

始めはパラサイヨが支援する孤児院に収益金を寄付していた

が、2006年からいろいろな団体と協力し、収益を分配している。2010年大会では約1,000万円の収益があり、10団体に分配した。参加者からの参加費をより多く子どもたちに届けられるように、協賛企業を募り、大会の運営の資金源の一つとしている。

フィリピンの子どもたちは、支援のお礼にと、参加者全員に首飾りを手作りで作ってくれている。

PARACUPのテーマを会場全体で表す

PARACUPのテーマは「分かち合う感動」と「喜ばれる喜び」。それらを感じられるよう、さまざま工夫を凝らしている。例えば、ランナーにはゼッケンの下に自分のニックネームを書いてもらい、応援するボランティアがニックネームで呼びかけられるようにしたほか、ランナーにハイタッチして、走る人も応援する人もその時を分かち合うことができるようにしている。

また、マッサージや足湯のサービス、飲食物の無料配布コーナーを設置し、その横には募金箱を置いて、見に来た人たちが自由に寄付ができるようにしている。世界に送る子ども服や文房具なども受け付けている。コースの要所に共催団体の展示物を置き、支援への理解を深められるようにしている。喜ばれる喜びを共有し、小さな善意のともしびを集めて大きな炎にすることを目指している。

2010年度の開催後アンケートでは、「PARACUPへの参加がチャリティ活動につながっているという実感がある」と答えた人が64.9%、「PARACUPを開催する各団体・活動に興味を持った」と答えた人が75.7%だ。



PARACUP会場の様子。ランナーとハイタッチするボランティア

運営はすべてボランティア

事務局スタッフはすべてボランティア。彼らは20～30代で、別に仕事を持っている。担当はマネージャー5人のほか、大会の運営担当、ボランティアスタッフ担当、祭の盛り上げ役、チャリティについて考える担当、広報担当、会計担当など15人。毎週月曜20時から渋谷のカフェで定例会を開いている。

このほか、大会当日のボランティアは約500人、共催団体10団体、応援や出店、物流を担うその他協力者が多数いる。大会当日ボランティアも参加費1,000円を支払って参加する。事務局スタッフや共催団体がそれぞれに集客目標を持って楽しみながら大会ボランティアを集めている。

運営ボランティアも大会当日のボランティアも、「私にもできる

かもしれない」と思えるようにし、何か役割を与え、誰かのために貢献しているということを実感してもらえるようにしている。また、ボランティアは仕事でやっているわけではないので、評価されることも必要。感謝状を授与した年もある。皆でわいわいやれば楽しいと感じてもらえる。

ボランティアスタッフの満足度を上げることも大切と考え、ボランティアチームを設置している。ボランティアをお願いする側としては、彼らに「ありがとう」と言う必要がある。ボランティアの人たちは見返りを求めているわけではないが、彼らの気持ちを考えることも大事。

講師紹介

森村 ゆき (もりむら・ゆき)
一般社団法人PARACUP代表理事

